袖中抄

特1
1983

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号 特1-1983

ガラス使用

昭和四

袖中抄

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号 特1-1983

ガラス使用

特1-1983

袖中抄

小河原

あ

あさ川

ほたるとぶ　ほたるの火

ちらしわたす

あさぎの浦

あるまの板

いつしかみ

ひさかたのみやこ

いまかるの

やそしまの

みをはたて

ものもかのと

ものみもまうのはら

ちはやひ

みるめのさとの　わたのさとの　せとのさとの

吉賀の山　吉野のるるの

きを時雨秋

みたらけさき

くれ川

雷のうつ　ものふ

ものふ北やそちうハ

さ夕ぎ波

ぬまぶ月　ぬまひかたり

なみやところ

はつき

そそも

ものれ草　ものふき

あらき雪

あり寺

ものもそ山

ものふのまり　たちみ草

宮内省図書寮

小河原

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号 特1-1983　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号 特1-1983

ガラス使用

[illegible]の海[illegible]にて[illegible]あまをせて鳩の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]人をとゝ[illegible]とも又人を[illegible]あり[illegible]と[illegible]せんと思ふもの
をあいせて[illegible]と鳩をくくいつゝ又海人乃やまもりにて
[illegible]をかりてうくるをいまゝ[illegible]と云[illegible]とも[illegible]と
思ふをりふしもとゝ[illegible]
岩舟の云
海ふかきにもとゝ[illegible]秋乃山人それのゝ掛をさゝせやいかる
堀川院百首に立秋哥を影響に
[illegible]れ秋の風の涼しきもとゝふく秋の[illegible]
同百首の論歌に仲実朝臣
海ふかきにさんをれ[illegible]秋のそとそれ[illegible]
此哥ともに庵まつ[illegible]ぬ[illegible]人まりうもたゝの[illegible]
奥義抄云秋もゝ[illegible]のしろきをうとゝ[illegible]て鳩をくゝて[illegible]
[illegible]ゝあみをもりて口[illegible]ゝをしてかゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]をあいせて[illegible]鳩をとゝ[illegible]
[illegible]のたちくるを例るに[illegible]のあるに[illegible]
[illegible]ゝ云

或伝よいとゝのゝちゝ鳩を[illegible]て[illegible]て鳩を[illegible]と云り
或伝[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]を[illegible]て鳩をとるとゝ[illegible]
童蒙抄云[illegible]ゝ秋の日より鳩を帰さゝ[illegible]と云
[illegible]ゝ云[illegible]
今云此[illegible]ゝ[illegible]云[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
いもんまくたりいるも人のもゝ成ゝ[illegible]
ほうゝ　志の先　いるの先
志の先のほうゝとあけ[illegible]ゝ[illegible]庵[illegible]
弘昭云ほうゝと云ゝほうゝ夜の明心の朗と云文字を書
奥義抄云ほうゝとゝ万葉やゝ明と云[illegible]
私云万葉[illegible]ほうゝ[illegible]
ほうゝと云[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]
第[illegible]云
あさゝゝねるゝ[illegible]の小竹ゝ眼の[illegible]

あさちはぬるゝ河の瀬は細布目よりあらはるゝ
又曉といふるの花とゝ云り志の花と同し
と同意又ぬるゝいとゝ紅のぬるやと同し
あゝ見まくほきまくほしきも物思ひ
それ七夕の歌
みゝりうけくき
あるは川水流草乃秋風
顕昭云水うみ草は水の流よりなる草を云
歌云
山川乃水流るゝやまもとけやまもいもゝ
花うみ草とは水の流よりなれを水うみ草
歌は山菅とさゝり天川の歌いふるよ
よをあるは草とよめるこれあるの川よ
あるはとゝ兵庫の河よるもとゝ
久要の天川原よりぬとゝりれらるゝ
ちのうて流るゝ物まれ流を川せの
歌

今年よあまの川よ岩川るゝ
よりつまれるゝひよせて流るゝ
あてゝ
云ゝ川うみ草ゝ菌式云ゝ
とゝ
川水うみ草と云ゝ天河よ
歌をかくるゝ
今云地ゝ川うみ草ゝ水流ゝ
さゝ乃書板をうゝ
さゝる此歌のるゝ
ちらゝ
山の端はさらゝ
顕昭云さらゝ
月ゝ別名日佐
私云此歌ゝ山の端乃ちらゝ
わるゝ

又月よみ男といへるもあり　万葉に
あめにます月読壮子幣(ヌサ)はせんこよひのながさは五百夜つぎこそ
みそらゆく月よみをとこゆふさらずめにハ見れどもよるよしもなし　紀
天の原みちとをみかも月読の光りすくなし夜そふけゆけて
月読乃光にきませあしひきの山を隔てゝとをからなくに
今案に月読をとこハ是も月の名也月をハ月よみ乃みこと又月よみの
神とも申す也月よみの男とも月よみの神ともいさねと月よみのひこの
みことよみまれハ伊弉諾之日本紀注一書云左の手にまそかゞみをもちて
みをとりたまふ則化してなる神是を大日孁貴といふ右の手にまそかゞみ
のかゞみをとりたまふ化して出る神を月弓尊といふ一云月弓尊又月夜
見尊又月読尊今云月弓のみことハ則月よみのみことを同事とよと
同音之然者月よみをとこといふも月神を男といはんもあやまれ
又月人男といふもあり　万葉に云
あまのうみ月のふねうかべかつらかぢかけてこぐみゆ月人をとこ
たなはたに海をわたりてぬきられんとしを漕ぎかへる月人をとこ
天のはらゆきていむとしらまゆみひきてかくせる月人をとこ

秋風のきよき夕に天の川ふねこぎわたる月人をとこ
ゆふづゝもかよふ天道をいつまでかあふぎてまたん月人をとこ
今云此月人男も月の名なり但月の舟をこぎわたるといひて
あまのかはにてみゆる月人男と云つれハ月の名にハ月人男有
るべしと也又私讃歌る月人男といひつれハ是も月の名物数
童蒙抄云月よみをとこといふ桂男之云々此義につきていふも月
人男ともいふ桂男と可云也常に人此思へるや月の中に桂の木あ
るの事乃名もなふ人あれ桂男とのふと云り
私云月の桂といひ月のうき紀といひかつら男と云皆月の中に有
といへとも皆是月の名にいひせりされハ桂月とも兎月ともいへり
宜に見ゆる月輪之上に月天子いますみ給ふ月天子是則
月神之されハ月輪を月の船ともいひ月の神ともいひるいされ
ハ其月輪の中に見ゆるを別にうつしたる事もいふ一世俗
いかりつる男こやいつる月の見に船にのるもいへりされハ月よみ
をとこ月をとこかつら男とこかつら男ゟ同物と云候し
見る川

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号　特1-1983
ガラス使用

しからのさゝ川のなかめ比久具津まて潮まもりてふいさ出て見ん
顕昭云くゝ川とはわらまてふところのやうにあみたるものゝ文字藻
なとを入るゝ也
童蒙抄云くゝ川とはかたみをいふ也
今云かたみに飯さくゝ川のなかれ
しほかまの浦
みちのくはうらうらあまたも志ほやくけふりのほりてかすみも
顕昭云此歌はみちのおくは風もしらめて海辺ところどころありときけと
みなはいにしへの浦しほかまの浦これをいふしかはね文簡らく船乃
綱手ひくさ海こそ浪なく見ゆれともしけやうすけもとよめ
るを思ひ合すれは志ほかまる心也
六帖　伊勢哥
志ほかまのうらうら見ゆるはたらふねのをさこもかきいはれける
是も此古今歌を思ひてよめる哥やおもふ心をかきけり　又伊勢哥
あまふねのかよひきしより志ほかまのほのかにいそうふ鳥そつきさまや
是も同しき海のことなりや

伊勢物語云むかし左の大まうちきみ六条のほとりに家地まことにおもしろく
作りて住給ひけり神無月のつこもりかた菊の花うつろひさかりなるに
もみちのちくさに見ゆるをりみこたちおはしまさせて夜ひとよ酒のみしあそひて夜あけもてゆくほとにこの殿の
おもしろきをほむる哥よむそこにありけるかたゐおきないたしきのした
にはひありきて人にみなよませはてゝ詠ける
志ほかまにいつかきにけん朝なきに釣する舟はこゝによらなん
と読けるはみちのくにゝいきたりけるにあやしくおもしろき所多かり
けりわかみかと六十余国の中に志ほかまといふ所に似たる所なかりけりさ
れはなんかのおきなさらにこゝをめてゝ志ほかまにいつかきにけんとよめ
るなりけり
是は河原のおとゝの志ほかまの海をうつせる心をよめる也
又考社園抄云塩竈宮此神は田村将軍の時五万八千人云根
をかしける竈也ちかのしほかまの海とそいふ
古今云
みちのくのちかの塩竈ちかなからかけて君にあはねはくるしかりけれ
志ほかまの海のまへにうちよせて思ひのゆくよなりけれ

奥義抄云みちのくにはあれと云〻
是は世のものわすれけるをみちのくにてよみけるにや此みちのく
すゑのまつもあるまじとあらぬ身之かゝりしゆへにまさるとよへる道浦漕
なそいひこともなく行末もしらぬ海にこぎゆくらは
かゝるくにゆゑにかくのごとくによせくいつるこゝろ行舟のあや
れあらぬことよめる心なり
此歌心を深く思ひよまれいはかはゆんよしくおもふ一
教長卿云みちのくあまたかたあまたとよれとも人とたゞし海の浪
乃しまの浦てはやうにとしられ身にいる道縁みる心ちしと浪こそ
是もいつはりての心浦まてうちしとそよみなれつるまでの風ふに
わのれなきと心えへりき次
ふつせと浅ゝやこすやうにて波の海にまつ浪のしほれ
同注云海の浪のしほれ松に寄せくよするしまの浜の松の海の沖之
童蒙抄云昔みちのくにはらし末の海の明神よちのひかりを有て
いとりもたゝぬをゆくまいりて此神は寶殿の内よりくのゝ浦り
まゐりとの浪なきようにして神殿よりさしいでゝまかり立ちそとみ

けるに心まよひけり是より此社の命婦をみやりかさねさらん限り
は親子あらひよりも海しとちかひとしよさまひのまつりの日なれ
ね浪をへりあひ見し伴の宮を免此子孫今は浪きてその命婦
なり春見陸奥國風俗云〻
望海かけりまふなり
浪きとくれあれしの山乃風にひとく人としらへのかやまうのうしろせよ
顕昭云此あとを古今集神あそひの歌此中にとりものゝ歌之やまある
つくは神楽するに浪きはれ乃かゝりうそかしらをからとや海かつくと云
考日本紀云掘（ネコジニシテ）天香山之五百箇真坂樹而上枝懸八坂瓊之五百箇御
統中枝懸八咫鏡一云真経津鏡 下枝懸青和幣（ニキテ）白和幣相與致其祈禱
焉云〻亦以天香山之真坂樹為鬘以蘿為手繦（タスキ）
古語拾遺云種麻以為青和幣穀木（カチノキ）種殖之作白和幣是木綿也又云堀（ネコジニシテ）天
香山之五百箇真賢木云〻又云以真辟葛為鬘以蘿葛為手繦以竹
葉飯（ヲケ）憩木葉為手草（今多久佐）
今案日本紀にハ以真坂樹為鬘とみえり
古語拾遺にハ以真辟葛為鬘云〻相違あるなり海きにはよし同

かつらするとや賢木をかつらにせんるはかならすあるへきにや杖なとをもちて
かさしたるにや又神楽譜には採物中に葛あり此葛をかけり但
まきもくのあなしの山の山人と人もみるかにやまかつらせよ
穴師とよめるはこの山は大和にありまきもくもおなし此山とは只ふるき
いひならはせるにや穴師の山は山城ともあれ大和ともきこえたり両説
不用葛は庭火に用後葉本末を用之
見やまにはあられふるらし外山なるまさきのかつらいろつきにけり
但八幡御神楽には採物九を皆持て畑く別に葛といふものや
なし又ひかけとて蘰といふものなし
綺語抄云あけかたのよのあけぬ雲山かつらと云或人云よのやまかはに
あるる人を萩乃あくるゆとにそのかけをとりのくれは山かつらせる
といふはそのと読と云之あるは浅きの山のはのしらむを山かつらせるといふ
いまと読をさんと
今云山のはにかかれる雲を山かつらといふをかつらにふかくる萩のあくるゆとに
光のくらかつらのもえるやうなれはいふまこそ山かつらする人のあかつき
まいりのくるゆへとそいひ侍らん覚束し

奥義抄云人もみるかにとは風俗同之見る程と云心也山かつらは桜
花沢て不書之
教長卿云あなしの山は本院より御神楽乃庭火ともなき諸社の祭
まもるときにも用る生験家此さにおり此本なる人をうたふと云
物を知出てよりうしろに似き海いしてもへる也是神楽をうたふまし
かしこ海るとかいて諸社祭の上に辯なと供神物し時も皆らの挫
ふとして冠比なるもなふらやまひすしこ海るとそかくせる也常にも
神態の時も御冠をはせないしまた之神態と云者神今食新嘗
会なとに帝みつから供神物をとりあへさせたいしまた之近代らの支
称なり文字ふのかとと宗事も同辯事也文時卿哥云
ひかけきえ神のらぬ海ならみかはしもらのたかまにゆふかつらせり
此哥を頌法てまきしてあふとよまれ当るそをわかみ紀ルるを文時に
少て頌のぬしへ志まはしくとらるつのれけるたに云条也弟兆也
見るとせは神の紀ににて紀とて紀てけり
それ此哥上句をは中さされ侍し是も神祭乃心也又古哥枕云神海
つらんとて志ねしまありよはくへ乃かふかけるを山かつらといへり

かしこさのみなとそしられとりけるにや推察にもとるまや
あるじのすみか
これは三日此山をとふらひしくはしもしひきませ杖まてうちと
顕昭云此歌は古今雑部読人しらすの歌にしのひしくをとふ詞
にはあるを新撰には無跡にて載たり世人皆是ハ三輪明神の御歌
とおもへるは僻事なり然もあるされは只三輪の山のふもと
にすみける人のよみたりけるなり此歌をもちてあるしの杖とふ
るをは詠ましけるにこそ或は三輪の明神住吉の明神の御因む
とよへりとも記せる
あるへくもみえきませぬ物申へきや人のまよひといひけん
とおもへるなるをハ拾遺抄には此歌住吉明神の御託宣と記
しるされたり三輪明神ハおなし神なれはおなしきにや住吉ハ女
神なるをおほしめしたる又神功皇后代新羅給之時住吉ハ大将軍
日吉ハ副将軍将門追討之時ハ日吉ハ大将軍住吉ハ副将軍之三千
の法施とけ給ふなれ日吉住吉まもり給ふに記にも偽られ侍るにや
おほえへハ住吉もおなし神なれ又今のよもあらはしきませぬ歌を三輪の明神

住吉の明神にあらてハ何も通するへきかもしれぬれハ女神を三輪と
も申し無現其社の男女不審なれハとかく申に不及只是神恩
難計事をあらはしたまひしもおもひきりもなきに住吉
只社中に玉津姫のおはします女神也其ハ衣通姫の成給へる
と申ハ世にしられたる事也　日本紀にも住吉大神大三輪神と神代
神也大三輪神ハ三諸山に住し　住吉大神ハそこの江乃大海神古事記
云墨江之三前大神也此荒御魂ハ常在筑紫橘之小戸和魂今
ハ摂津　墨江ノ神功皇后神遷居摂津　墨江ニ云と古語拾遺云
大己貴神大和国城上郡大三輪神是也又神功皇后三輪明神の垂
跡なる事又日吉大明神も三輪明神を伝教大師の天台宗
守護神のために勧請したてまつりける始にてもありける大宮権現也大
ひえとも申し二宮地主之神ひえとも申　大宮ハ本地ハ釈迦垂迹ハ法形
也二宮本地ハ薬師之垂迹同し岩名抄云杖をまもりまて三輪の山を
たりぬるとも侍人もみれはあるなし
昔大和国に男女ありて年ころすみけれハとひるとくもありてたちいふに
見ゆる事なかりけれは女のうらみて年ころへ中なれといひけるその

うちをたてることをかねたまふ事なりと雖
ども形見をとどめおきたまふいとふかくひ
ふきいくそいくそうたをひとのうたちうたふ
くもねのいくそたくさん
と云いたうりたくはれるの見ゆ一月の中まわり
とうひくくうてはいとうのあてうたいちいさ
るものおとろくはなはだしくおもをかひてのきぬ
おとろきおもてあるとうとうりと是も又きこ
らんとひちきりてなくく別さうぬ女うと
ばかりうひとうんと
ばかりみれ思ひて苔のまきあつ先をとい
をたけしるのとりと物衣のたりまきつ
一とうあきりて是いと三條の内御の内のあらの内よ
乃物りとけのとりなりけれいと三條の山ふかふせをいと
童蒙抄云昔伊勢の國あふきた弘よ住る人の深山よ入て麻
ち住る後よ風ふきあはるりたなりなりて事とのあり
形是一て是たり一日とてれ屋のとくしているつまの光たとり
御所是を射てあてり其後風あやとてうとりは衣の内るまに血

の跡よつきて引いるよ遥なる山中よ分もるれて野中よ塚あり
中内まとりて塚乃前よ御女ありて其御所をまねく別ちよ矢
をとりてとりみよる御女おそるくいとく世ういとり
りるものと其塚まとれ思ひ我らの思ふ思ひ御所樂をうりて中塚のたちよ
すとり海よ思とうろ浦一うふ御所樂をうりて中塚のたちよ
いきて内をつけく焼ろ一つ中後其御女を具して家ようりね
おの後事三年まるる御所家業又二人の児をうあ
中付其男白髪よある紀りて中よ其女うせぬ海て見る其
くて児二人あり悲て乃内ケと物方をおの和ちいくありて此児又
うせぬ海後悲一て独よる女の常よ内ケとるよ三條
此山中於ある門と中書付ようりはるて三條の内御社
為て此女よあるとき御行御社の内戸をたしひきて
見中内児乃内男志乃切るを見てちうひて御よ
るりとみくうはまりて中御の命をい伊勢の国あ書の跡の
人の物ふとれより立るの於ふ一後よいと思ふ御と
るとしふて是

今云長谷村の伝よつきて芳の弥りこ日あれい三輪の山とつくるも
いくとも人あれと日本紀を伝やまとくしの尺とのまくにられいあ
しのうた童蒙抄の伝よつ紀く見いふる紀物語さされと彼四神の見
まとられ伝るとりまきるまくきるあ又前伝まい男神ときうあ極て
万葉め世物語ホを和ようきて俗名常事大和ようふ人を
三輪の板よ来て張るう俗の宮よ見るるまを伝吉のきにつま
て人まりうまくきたまるる見物語ようもようてある
ちこいうりける歌といまいたしあきこ先きる
三輪の山いろ伝ろん中ふるもふりぬるくあること花をい
ことの山ちるし板をうせるもなれうい人の板を尤り編ん
本紀も紀山とりて引あれい神のこあやる家ようねま川
あ右のまりを書しるのりり板もうるいるねまる海
奥義抄云世三輪れ四神い社もるくて祭の日を芳の塩と言
つりて岩の上にをきてそれをまつるく社のわいせねあやしそを
のねもあつまりて法りなりられいる百年いてきりてくひや
りふをうちてを書もそい名くて伝はりまりを後神乃

ちひとまりてつくすとそ
とのふれやそうちうい
ものふれやそ后川の個代書よいをまの屋のの書をひも
顕昭云ものの海ふ人の姫名ふ人の姫をあれい八十氏とうを百姓を
以ものを国る数ふ八十といを法のうを海ふ見を解てものふと
いいねとやをちくいるあうろ歌よきを海ふ風をふ海ふ
奥義抄云ものふふ五きねといふも男をるくていをそ
うちほふふ人の姓を年ものをふれいやをちうふ后川とをん
とそやをふつくやを氏人をとふ八十氏の人也
ねをいやれ面をちくの君ふあいふりうふいるいの氏
私云人姓八十あうと定紀ふれを国るをやをちとうを

いくふを
いくふをやをの国をねのをりよあひをを氏あをねをきうれ
顕昭云ものふをを陸奥のをふ法もれいくふをあり日本のをを
とをり但田村将軍征夷の時馬の鞭をの面を日本の中
夷のをとうを鞭い石文をを書をとをり信濃侍従のをを

石の面長さ四五丈斗なるよ文ありつけり手爾をはつかと云し云
それを法もとはいふなり
私云みちのくに石の柴のもとと思へとあるその歌を聞てよめる
ふを陸奥をいとんよ日本武中興(史)まうしても伝きこえ
けう紀さん
いまへとも(いくやへ)とをのちまさ紀さんはるかに行りはるの歌
弘昭云伊勢舟長はいまたとせぬ女をさう紀さんはりまそ
あるとるんやのされいあををゑやしまとふられい男せき伝へうハ柳
されりたいりまものをとくやしめる心はを後拾遺
いさかりの三ゆる
久うのみやこ城紙きて茅面てきひ仏きみを問ふきん
顕昭云ひさうとに月をいひ又そをいふとをもとをるる
るいる紀を万葉集よ久うとい或書云久国と或本久方られ紀を
いとひて久しくかうしと云
童蒙抄云帝の知られい天関をいふよひられてそるよせてある紀
日本紀よ帝宅と書てみやことよをてるらかく

私云天関を日本紀よ月のうくよ先り
いさうひ月 いさうひ月
山の海よ不知(イサヨ)歴つき紀 將(イテム)おうとをもつてをるよ歩て歩みける
顕昭云いさうよ月とやうこふ月と云
月れうちのりやうねをまりやもも
きうひ人とありめるうを山はをそ
くとあるいうるひなくいて風と日紀
山のそにいさうよ月紀ふるもうをもつを
やうのそに山和世紀つきのいそんうとうを
はかうもいみいそやうをうをきり又ら帖かよ
山のそにいてをいさうよ月まつと人よいひて君をり
はかいおひのそふとまれいおぬるよ紀をを人あれとを僻るこ万葉よ
あ一月の山うりある月まり中人よいひていそ
はかり紀をきる世るこ拾遺よも山をり我を
紀幸ハ君をうをををうけり
山の海よいさうよ月をうをあるて いくよ月をあくはの河ん

新撰よ

おきつらん月とは山のあなたにと見てもいかならん（きまよふらん）や又万葉集に
ものゝふのやそうち川の網代木にいさよふ浪のゆくへしらすも
是もやすらふと心なり
綺語抄云いさよふ月とは山の端よりさしのぼる月を云 又月を日ならそ
にあてゝいはゞ十五日のよるより見るは三日月七八日ころの弓張十五日をもち
月十六日いさよひ十七日をはたちまち十八日をいねまち十九日を臥待
ち廿日をいまちの月 廿二三日をは下弦の月より下弦をいふなるべし
はりあけ廿日十六日より月のいでぬさきに夜乃あくるをば有明の
の月と云 これとくはしく云ば廿日のころを云（ききさし） 弓はりとは上弦下弦と
て月のまだかたぶきて弓のはりにまがへり見ゆるなれば云なるべし 弓張
て出るのやすらふる程をいさよひとやは云ふ 此の後二日の
のさし出るにいふる程をやすらふと云心也（きかすや）二日月よりいでまし
やすらふ心也 人をいさよふと云 いさよふと云 皆たゆたふ心也 後にも
と云なりいさよふと見えたり
童蒙抄云 いさよひとは十六日の月を云也 されはまへをも夜もあけし
ふく更 万葉には不知夜と書て いさよひとはよみたれば夜を

まよひといふ事のあるを不知とかけるはいさよふとよめるなれはしらすとみゆる歟
今云万葉には万葉にや山の端より不知夜歴月とはかきたれ十六
日をいさよひと云は見るにそいふへし
奥義抄云 古今歌
君やこん我やゆかんのいさよひにまきのいたともさゝす寝にけり
いさよひとはやすらふ心也 或抄にはやすらふれともいはるいさよひ
いやすらふ心也 いさよふ月物にみえたる月代ありてやすらふ程を云也
万葉集歌云
こもりくのはつせの山の山のはにいさよふくもはいもにかもあらん
とあり是も山のはにやすらふ心也 雲のたゆたふは同しく心にまよへる
常也
此等凡此類多之 書雜注之
又云
ひさかたのいさよふ月のあかねさすいさよふくものよそにつまさを
或本にはたなびく雲とあり 後撰 又非要使寄 同集云
あしひきの山をたなびく雲のいさよひにものそ思ふ のしみ

私云いさよふ月とてねかとをもさしおて彼をもいさよふとよふ也しいさ
よふ浪いさよふ雲とめよめるあまたいあしろ木にいさよふ波も山ゐた河
川ともいふ一ゆくをとゝめかねよりて心得へき歟

いさら川

いさら川のまさこうえてあそふよしおこの数を又も見んかと
顕昭云いさら川とハ何の中にもよむ事あれハ広き川のほとりをあれハ石
流る水もいさゝか流るゝ也又いさら川ハいさゝか流るゝと同意也万葉云
あめにます五百枝綱もふ萬代に国さかえんといふつたなる
此いさゝかなる心也是を思ふていさら川とハ云也又いさら
きさらのとのゝつかいつまりなるともと同意也

と律みやこ河

月も日もかはりゆけともいさよふなるみわの山のとけ川宮ところ
顕昭云とけみやこと云ハ瀰津宮所と書り常盤也流ハやまあ
るさされハ在の宮所といふ也いさゝかなるを久しく経る也又万葉云
余流に尽しせぬもゝしき君か世もと在郷御門とよみ
流ねつみかへいつもと川宮ところも同也

やそしま

わたのはら八十島かけてこき出ぬと人にはつけよあまのつり舟
顕昭云これもしほとのふえたにある国の名あり一にはあはの国にやそしま
と云所あり一にハ八十嶋と云これハ一の名をあまたよみたるあまたの嶋を
いふ也中にも此歌ハ小野篁朝臣隠岐国へ流されける時舟にのりて出たち
川とてみやこなる人のもとへつかはしけるハいとはるかのやそしま
とは思ひもよらぬあまたの嶋といひて見いつと思ひさたむへし
但此歌は義も難しくて云おほくさるをいふ千嶋とも百嶋ともよむ
然し何云八十嶋字義云
千嶋百嶋とよむをも見ゆ又八そ路嶋のきはなるれい第の杣の数といふまて
やそとよめり又雨しけの夜もうらやむともいひつへし又やそのつきや
そのちまたやそうち人やそのくまねなともやそのちまち
ねかふとも見ゆ又萬葉にも九十八十一とていゝさかある数のさしなれなるを
又万葉云
これはをやかしからくりきかせてふかの路ハ大ゆれかるの川も
私云此歌ハ伝底水調と云他はあまたの嶋をもさまくりハ

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号　特1-1983
ガラス使用

或人あやまりとは何れとしもまよふといふはまぎれたりまよひと同意之文備
かれとはおもはざりし　又云
思ひ出る数ならぬ身はやそしまのやそしまのうらにいかにあるらん
私云此哥ハ安芸國下毛脚之哥也あきしまの
上総防人
もしほのみちはきふしをまちてやそしまなみてみえけるかな
文拾遺集云
もしほきのおもひやるやそしまをみち心ちする秋の夜乃月
私云是も志まをもちかよふる見えける也
此哥をかゝる　堀河院百首　紀伊公哥云
秋乃夜乃月をもちかくるかもれいやそしまめぐりつゝちかくある
代かはるやそしほつゞける内のなめれとなかちてやそしまめぐり
とりふさはなるかれも偏にそれもあるく遠見を住吉浜のうらさきそ
西の海にまよひてやろしの楫をまくるあり或書に風土記
をみきて云堀江の東に八十頭(ヤツシマ)得と云所あり是れ昔女人児を思ひ
てこゝにて細をみつうなばるとりけるに水のたへの七十八ありてとひける

に此あまをのりける女もひきあげられたりけるがかぜふかく江に落て志にけれ
ば其のかしら七十八人のかしらなりければ八十頭とよばれけるは八十し
嶋とはいふ也傍是也唯しは中此一所の名なれどもありぬべしまた一所
ならずともおほくよみしをもあれはやそしまをいふとも事をあれと高濱の部を
由ありけるかなし
又萬葉云
やそしまをこぐまでも不待いひしろさかありあれせんひとるをみる人をとらも
是は相撲防人の歌也日本國は八十島けれと如此讀も　ひろいあり
ろそやま見て何も見もひとをもいそん人をしか
はしきゃ
そのもこやこそやにおもふもそのあらしいそとをあもぬ君かな
顕昭云先達さしは信濃國にそのさくやそと云所に杜あり平とり
によみてより其以第に似たるやその浦の名あるを見てかゝてそれは平床
もみてよ人に伝あるをきゝてはしきそこ此歌は平定文家
の歌合の歌之
家成卿哥合　藤為忠康哥云

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号　特1-1983
ガラス使用

はきふ法師やこれなるさゝ[illegible]のそのもとよりのくてきこゝあり
基俊判云たゞあもききたつまやらをれなるとよまれるの心はなく
はり此歌のはまいやうふもきふらもまれふらはん俤者のこゝろ
らもはいるまりきるの風榮もやーるの根よあつまりをひる
本もはきるは)中よこれもとくいそんよくこゝろはるま
ろむさしあらねい哲のあひさ第の中に[illegible]をれんる文可ーを
指注文後の考るの本指角とーるが可有
むのール土地の山を見はりーよこそ此第本のもしい大略尺はを
ーらされと年のたまりのりて[illegible]ーしもを尺年伴本い更
濃信濃為母堪のはやとこ云ふよある本尺はこをはい紀を
半そるやらゆくたりちうて尺は[illegible]は[illegible]似る本とるーは
ふありとこれとあるねはのたくはは
右の云そのもやこ[illegible]此歌の心頭の本文心已相違詞の相違
逸
伯顕仲卿判云尤もきふつ本をいくこりはは[illegible]
しられとる本もきくいちはりをとりはやや

侍従抄云もきくは二の論あり一は第本のあるもはるを牡いと
ちけくてとりの中ふてきく初ひとりをれをとゆくて見は)いあるの机
すし牡のちさは如尺くは)は本のちけをそ尺ねは)一は第の似る
本の其牡は有こをはをそ尺ふこは[illegible]ちのくようて尺
ふるいらもふりされいうふあり兵はいとのさ[illegible]はるふ逆
報云は母尺はいは)海さことはひたー牡の本乃ちけくてはきそみるは見さと
んそあやーはとふあーたはは[illegible]本名をあくはふるはのも
とゆくていこは)と迫くいそをは[illegible]そあやーは毎あーはいは)尺
備ふふくはそをとふ[illegible]ふりさそは[illegible]ふるふ
ともはうーはいはをれふこと多のり
云名所云は[illegible]のふふ恨を書たこのをーは信濃四ちのいーは世や
とこ云本あふこをとよ牡のあるゆふをそ見は)は遊まをきをを似る
本のこをくのこゆるふ迫くふふ尺は)いう世を生と紀は本のそ多み
はるとはは)俤くふこをとふふふふるふ人ふくはいさ本も尺ふをとそ十れ
苦ーをはさゆーふるくけをふらのはをとみ四ふ本のみくさをそちふく
ふりをもはんれめとをや

私云此哥ハ古今云又為忠哥ニハ〳〵そ杜木なとさまさまにみえあるへしと
存也
長暦哥合　師賢朝臣　後葉ニ云
はゝき木杉やいつこかわかれけんみるそのはらはたちしまよひけり
私云此哥ノ心ハ杜木中ニまじれる一本ハ木とみえ
経信卿記云此哥本大權輔伯耆未哥不使事也者筆跡古勝
雖不知不遲
私云経信卿記類ハ金葉ニ載　伊侍従哥　師賢
此風よちる紅葉の赤さ〳〵はらふ山しさは　あらしの風
奥義抄ハ後拾遺云
さこの文にそえあまさにも河し見ゆるもとのありといふはあとつけなりし
今動國史云仁明天皇承和二年六月ニ勅如河東海東山両道河津
之處或ハ渡舟数少ク或ハ橋梁各偏由是貢調擔夫來集河邊
累日経旬不得利涉宜ク毎河加増ス渡舟二艘ヲ其價重ニ者須ク正税ヲ又造テ
浮橋ヲ令得通行ヲ建布施屋ヲ備ヘヨ干橋ニ寄其造作ニ於云用ヨ救急稲云
陽成天皇元慶四年云弘仁十三年國分寺ノ尼法光為救ガ百姓渡度之難ヲ

於越後國古志郡渡戸ノ渡ニ建布施屋ヲ絶墾田四十余町ヲ渡船二隻
令往還之人得其隠便ヲ而年代積久メ無人労濟屋宇破損田
疇荒廢ス望請被充越後國依ヶ人ヲ永令預守云々
今案ニ信濃なるその原といふ所にふせやといふ所の則にあるかと思ふに
布施屋と云所ニ造れるにこそされハ信濃なるその原とよめる布施
屋をたてゝありけるにや
又俊頼朝臣田家秋歌ニ
山田もるきそのふせやに風ふけはあせふしひしくゝりうつらなくなり
是も谷のふせやきそ川のふせやなと云并とも有るに信濃の波
ふもとの布施屋にゆるすや又きそといふ所のあり又信濃に
木曽をありて小さいの川ほとりにたちなるみて　おもにくちをはけ
てこの所りのやるるのはのかのこれのことといへりそれともふせやとそいふなる
みをつくし
君かするかたのくふみちぬきいとゝ経なしとゝて我そなりぬる
我眼ニ云みをつくしとハ河口なとゝふ水の深き所を漢とりし或ハ織ル
くみすつるのことを持非ニたへるにもの中ヽ世俗にハ云ふさゝし

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号　特1-1983
ガラス使用

とふ堀和歌にはみなれくしとよめる之又水脈舟とかけてそこをひきの
舟とよめり
又万葉ニ云
水咫衝石(ミヲツクシ)こゝろつくして思へかもこゝにももとな夢にしみゆる
私云このまへにはみをとよめる也
又土佐日記云みをつくしのもとよりいてゝ難波につきて河尻にいる
るといへり　國史ニハ難波津ニ始立澪標よしあり　年月可考注
云くれ哥
わびぬれは今はたおなし難波なる身をつくしてもあはむとそ思ふ
津の國のなにはおもはすたてしよりみをつくしてもあはむとそ思ふ
よろしくもかくしてまつ　万葉ニ云
きみをまつしらなみたかきなにはえのみをつくしてもあはむとそのみ
又津の國のみをつくしもしらぬなり
きみ上のみをつくしにさしてもまたあさき心をみぬ人そなきこゝろ
河内なる三門(？)
うらなるをもしらすにくるゝ仮たてよるかたもなきみをつくしかな

能因哥枕云みなれくしとは水のあさき所に立る木をいふ也之
そとも
我君のそともにたてるかつらの葉のしけきちとせをまつはかるなり
顕昭云そとももくらしろといふ也之
考日本紀成務紀云陽面影面　背面そともと云
南は日のあたれはかけともといふ　北はそともといふ也
又日本紀ニ山陰道をはそとものみちとよめり
万葉ニハそとものくにとよめり
云名抄にはそとものくにとよめり
綺語抄にはゆくともといふ之
古今云けさの家にはきりたちのあとをいせとりいふそとせを内外
又只そとももいふ
四條大納言哥枕にはあまの戸そいり一本には我心の門より外をいふ一本そ
我家のせとをもいふ
能因哥枕云家のうしろのかたをいふ
或物には山里のうしろをいふ

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』 請求記号 特1-1983
ガラス使用

古奇云

山ゐのそもそもうれはしうけたまはる如月もはるまもなくまこと雪すりまはり
高きをれいうとうれはきりたてそるとゆくさうり又ものうこ
ゝもいせとるときこゝ侍り

本院侍従奇云

あ者のそゝとうるふうかりよ（きゝそそてゝてゝ尺はあ生ゐ侍りやと
おのとうれも

能因

能因のこのもかのとふうけ山（ゐ）と君うみけふまれけみまれし
題眼云このもうのとゝ此おもうのれもと云ことたとてる山を
らるさ松とてるてれとてあれいあ此うゆ侍り能因ふ生ゐ古今東
ゐの中に常陸歌〳〵信濃国より能因山あり同西行と古今序云
仁流陣例〳〵恵義能因山と法則生ゐ心うり
公任卿筆云此山鑒哉〳〵由見常陸国風俗ゐ中
能因山も山ゐ山ゐ紀をそたらうもうゐ侍
今案いつれの山ゐうもらのとかのもとゐ山ゐ〳〵うつまいさうり
けれうそゝ山よ寺ふ〳〵れとれ国やらい山とゐてゝあ

ゐ侍

能因ゐ云

山ゐ里ゐ侍ゐ寺ゐ山ゐ乃此面信濃面ゐ也ゐ侍ふ侍り
又いつ国の山ゐ寺ゐ山と　後撰奇云

山風のふきのまゐ〳〵紅葉ゐいうのとかのもゐ侍

家成卿ゐ合歌ゐ云大宮右衛門佐

紅葉ゐ今ゐ侍ゐ〳〵山ゐ山面信濃面ゐ数ゐ侍ゐ〳〵ゐ侍ゐ
基俊判云右の歌ゐ〳〵山の此面信濃面ゐ侍ゐ〳〵ゐ侍ゐ山ゐを
の山ゐ〳〵いうのとのゐ侍〳〵ゐ侍ゐ〳〵ゐ侍ゐ〳〵ゐ侍ゐ
〳〵ゐ侍ゐ〳〵ゐ侍ゐ〳〵ゐ侍ゐ

忘草　すのこ草

忘草つるひもすくなくとなりとるくはなもひろくれいみまさる

顕昭云忘草とい萱草と申り本草云萱草一名鹿葱花芒名宜

男風土記云懐妊婦人佩其花生男也

昌蒲云今人好歌楽忘憂草由野古有之　秋山康養生論云今欲

蠲忘萱草忘憂　古今云

忘草何をうたまと思ひ草にたれる人のこころなりけり

又云

偽草しのまを隠くれるうゐ草ゆ人忘草ものとなりなり

古今云

忘草たまくしげをなふるはいとゆくしものとなりせい

今云此草ともい萱草の心と見るなり　伊勢物語云

萱草おもふ神遊とい見るとこい出のふるりなもたのはん

其詞云仏前殿のまき母屋をりれいあるやんをる紀人の所に

わねより忘草をこのゆ草やうとそいるまを所をとりれい萱草

よみるこ　中務卿宮の二条の后とうん時家に仕の書機まそい草れ草

すのこ草　同一物とい此方は萱草をこのゆ草とい　まいはの草

すのゆ草とは萱草とい名のゆるやそのこの心見るゆ

我為乃形の出のゆまるまくやそ出るひまれ草ゆ

偽顧草ゆ

忘草とけれる家を見るゆまくいかをひのきゆるなりけり

又万葉云

我為の形のゆ草形をもゆ忘草とけれ見と又かの見

今云此草を萱草ともひも又形の草を偽り出すゆ草実名形

但色を萱草を偽るまをやはゆ形かけるる

ひとりのゆるゆ見ゆるの出るれい人をこのゆ草のあひる

萱草形云出のゆ草い垣衣とゆ苔敷ゆ家の形ゆかるゆ本草

ゆ忘草の一名を忘草とゆ云ゆ　又偽草の

家もちかゆ偽り忘草い萱草ゆ出ゆこの草昔の形ゆ

奥義抄云本草云ひもれ草　すのゆ草　伊勢物語

ゆ出ゆ偽り又出の形ゆ草ゆ草ゆ出ゆこの草といゆ

私考本草云　袒衣久眼補中氣長好顏色一名鳥悲一名恒己鬼一名天

悲一名風悲生古恒墟或屋上或云天蘇古墟比隈青苔衣也生石上志
名昔郎屋上志名屋遊古尾華子之恒衣地衣
今案わたれ草　苣草　苣草　苣草　苣草　苣草　苣草　苣草　苣草　苣草
苣

降雪あいなるやうそなりの井うひのをうれをそなせるくよ

冬日雪降云々

私考日本紀云君成雪あるのゆ師伝佛君ハ是雪し脆弱者

其弱如水佛故云佛雪或伝如佛雪者歟

うをうひ

さ月川よりうり河まるう宇頂良坪のうすれ心を我かとハうくよ

題昭云うをうひ雪ハ舊水と云ふ但上の月よ水陸きるとう陸れい

別物とかも雪くうをうとハ詞うをうひと云ふ也もれと云ふいま

たうとうるるれいもれ雪とうをうひ世我雪のをうをの花の庭

をうるもれのをうをうひうたるうをとう陸り又さのをふもれ雪

かの月ハ雪るはうをうひんといふ陸てたとうんもれ雪をいふ

ひうをうひ水をうをうをうひと云ふを思ひぬし古物ハいうをうひ

水をうふと陸り今云うをうひ水あうるはるや又云うをうひの云の

宮い水ともいつ屋しされと水とうをいうて坪とみをあやし

あをうを川

平早振舟の宮のあるをうを川松とうをうをみけいをうを

題昭云あをうを川い舟院のたいうをうを舟院のうをうをの陸るい河

之今の宮い舟院うを松枝映水とうふをを京極太殿の陸陸

又古今云

をうをうを舟の宮北あり宇をうを川堂うを陸るをうの陸りうをうり

又王御門帝舟院うをれ陸て陸陸川院の帝舟宮あり陸きうを

をみ陸けるよ高て昔を思て中院入道左大臣

あり宇を川同うをうれとうをを知うしのうけ北見くをうをうを北

或人云うをうまきうり法師うを高を屋あるい小川を云をされい陸戦宮

陸幸よ所陸家云はいうをを屋陸けれい

いさをうををみつ陸いうをふあり茂川君うをみあきよ小ふてそい見れ

私云見を解中之小地陸幸時本院のうをうをるあり宇を川

うをみつ見陸陸家陸

野るうを北をうを川　月うのをうを川

をうをうをを北をうを川出るけれとうを中のうをうをるを人を人を

いうをうの陸るうを北をうを川出るけれとうを中

題昭云地中のをうを川とハ橋庭の稲見屋みあり陸家をハ如中

他を陸れを陸のをうをうを人地中の陸ハいめをうを記陸水

世といふ　但考　能因歌枕云　野中の清水とは世のめをとのことを
いふ　今案云　手元をみくまとれめを野中の清水とは
あるをあくまでもとに野中の清水をもとめてもとの清水を
ちりなん人乃今年やまもりもとの清水
人のかとゆへ　心とはてしいそく　かつこ
ゆとあり　あるをかしらとれとも　あるいは　ふ
なといしたるをそ　後撰云
いふしの野中の清水月見るかぶさしく
又ときのめふりをとしきて
ちたをいとなさやかりはん　野中の清水月はなく　まれい
拾遺集　ゆのひとる人　ゆ　ゆ
苔　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
国集　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ

[illegible]

清水のこしとろまて

[illegible]

又神楽歌中に物[illegible]

[illegible]

[illegible]

てうたる歌

日本紀ニハ帝皇とあれどもみやことよたる也とあり

私云天開ハ日本紀ニ見ヘたりとあり

ちとせすて山

うちとるくさめうまりさとしるやとも程山ハてら月をうたて

張服云とも山とハ志るの國ハ国ハ田のやしろそやし

るひたくるともめ也　云よつきてかひのかとと七月のはつうりハら

雅ちひてのかりてたらしるの山ハ山てうきちうりとも出て山とハ

いかるしのるくかてうりめけうよりるくきめ可紀月と歌り

考古和名抄云信濃國さらしるとハ云ハ本かとこ出さうりの紀

時知やとも出ハ山をいとるん知やのとく　ちくしうあいそひて

所ちうのうち心いとこうら紀を知国て　時さうとめの老うと海

りるうとたるまふ少くて時ちとこふ海さう

るくあしきうち後ハよいきうせけれいむらしのもあしたかろ

うるとちかるくらるをもものたあるハ成ハ山ハ時をいとるくハ老

く時うくうてかうるる後ハ知られをとろせうりて今まて

ちるの時をかひくとてるしるの紀山ハまて後てうとのを

せあられいあるれくうてさうとかとひね月のいとあうる紀歌

をんるるとうきたうくまハたうと紀ハきするハせをうんとう（いまう

うんとひられいかきをひていたうる紀山の[illegible]ハをとるまう升

れいうの山ハつるとりてうきるるく　たうる紀山のうまのかりくうる紀

るあしあをきてるけてきあやくいとうもせくきあさて家

きてうをひかうるいひまうたちけるけうるもうたうかきうと年

ころかやのうくかしるひつあひうる紀くありられいとるるしく

かかくりうの山花ハうり月ハとかきうりるくあうていたうを

るうめつ紀ハとよいを稲くれるしるくかるくれい後ハうるく

さあの稲りたくしるやとうまて山ハてうたる月をうとうるみうくうん

又いきうくむうくしるーてきうけるうれうのちるんとうまて山とる

きるるくまうるきうとりいられうりーにうんありたる

金石物云山ハ今ハ志るの國ハきくしるのうくりうをうまて山を

いうる山のあるくを人のめいをるみりて年年やーるひけるうはの

うう年ハひてもつかりけきい八月十五夜の月ハまるくあ

かりけるに母をも妻もしのびかねてあけくれなりたて一人
山のいとなみをのみ思ひくらしたまふ日をみるにたへぬ
ものなりけるうるはしきいとをふたちつゝりてきぬれいはをとらうの
ゆきとりけるを後世山と云そのさまを見て冠山と
者ら冠のらのやうにとりやそれより後日をくはまりて
いとあり

今案信濃流と云物語と云日記にたゝ物語いとをいめいと
物語をもとりくりたりこれいまてやうにまりは者可付物語と伝説
山をもまてゆくたるより後は山をとりて山と云可云歟毎度
人のみてさまを見切記とりてもまた又兵かの月をなかめてを
るくさ見ゝ月と云ものをもまて山をとりて月をとりて不て流
説物語を由緒ゆを書てい後るけきいはしたりは古今
を書明ら定ゆ歟又あるいはき今みゝりるも常事
拾遺第三いたなき國を信濃と申奥より見度
りものの中神渡りものの中千國中をとりて山たり
けきい月はあるとあるいはあるいはあるとあるいはあるとあるいはあると

長ぐとけさんきまうてりこんとちうひく後さてまきくあるも
とう和名

古〻波のもち松ゆ枝のたれけ葉いと世ものそのあるん
松を後〻叶ものうひ葉をしれ葉又もはるを多ゆるたれけ
ものとは筆をも

松云は今は幸花伊國し府川偽皇子傳はさるけ葉をいを向
葉とうきたるを礼郷の布とはきをひ葉と神樂篠奇云
水ときの祈乃所代ものさの葉ふをたあさとうてあそいるしも
られを葉欲

今考古語拾遺云笹葉辟蔓為鬘以蘿葛為手繦以竹葉
飯覩木葉為年草今多久佐紀いたるけ葉い世を葉欲後
頼家云

多るけ葉ものきを記えのるれ松世ものいさし紀も君のたあしそ
云石代云迫葉の人い石代と云不のあるといものそ世たる人の
墓也後伝と云いものにらくるを知るのれい紀不そいよむ
ものきものと云い解るものや後冷泉院御時と

永萬四年十月九日家合に

左　　能因法師

ものを思いそのの　松を君ものそ世のそのいよる世世物思ん

右　　資仲卿

いものものなの乃風を幸ふれい松のみとりいかるさりり
是を天二年殿と中一関白殿の手を是をくいまさ
判者の宮ものられ世ものを是日山とものそのいそ物ん
世はものを乃ものものを世後れいさるものとそ又世は物を変
ものそ陽ものを藤氏の長者ものそ世ものれいめそ紀
ものそやをものり右ものい石代の松ものれとそ是ものは世
ものを人ものるそやをものる後を人のかものきけれいものとそ
ものをいものそ代者ものられるを人のそれ題変の宰相ものれ
石代の松ものいんあるものとものを世て後石代のものをものろ
きそ後ものを世人のものを乃ものとそ世ものるみものる資仲のそ
ものものものものものの石代の松ものそ世ものるの後の俊ものを
世ものを有馬皇子の後ものを世ものものものものものものものを

事もそれまでとしあるべきぬるるのわたりを思へい有命をいのまれも
あるぬ命ーいとあれたくも哭ぬとらそ中生海四ーうしら
或書云人の墓よりひろる松をいとーるの松と云るのあるよりの
侍従抄云昔天皇の皇子の物よくるひく結髪給云し
今云山事不堅ひ也不撥る出し
弗明天皇四年戊午十月幸于紀伊國温泉有間皇子謀反被
誅皇子已於磐代結松墓義仕古義不可有云し
又不吉之希也侍乳彼皇子後ー誅反被殊事不可有四衰哥
合乳物ーと兵たりきこのかの(の見よ脇ーてしてもありぬ一
万葉家持卿

やちくさのもれいらるふときまるる松のちえをぬきもん
是ふい古代ふるーまと結松とよめり
去りの山ーく　去りのまるうの
ちくるるや去りの山ーせーく(よあふらちまるるさるふ
題昭云去りの山ら(ーく少貴河の陵のうるるのりしぬ
の筆ーるよ去賀(い陵ーる

經頼卿記云後一条院御時殿上人行幸遥の為に去賀の山ーくとし
いり行幸山の歩行云し
流生山と白河の陵上より惠度法師
月の光花はきーらーるひのぬとしーく
方もあり去賀ハ往因ゴ寄合の御也心ーれ山ハ山博乃
人の陵れいはもまて法よ和歌いらくまーー
とーーーとをつやきる往因ーん長絶師
故真ニ集も人よ侍ーく長絶ゴをいを入云い但武家の御を古今春
下去賀山絶ー　女ものをくあるるるるるるーる
あつきるもるの山陵をこれいを道もさりあ(ーー花ーもりける
去賀よ女ーー花ーー侍ーれいーーいかの去りの山ーせーー女よあふ花
去ーー花をよあるるや
拾去賀山絶ーいるーるる也古今秋歌云去賀の山ーーーーある
山河よ風のかけーるる去りーみいるるもーあ(ぬーーみちるるるり
国冬歌去賀の山ーーーーーある
去ーー皇のーーるるーーーーー

又別紙之之ちの山紫えい井のまとふく抜いたる人の見られる
ありさまの事し
おもふるのさつくよりとる山の井はかつそれも人くよられ抜るかな
順集云志賀山越有りさちの山くの人花之間給忠君屏風哥
山かつしの風ふれ紅葉ちりやけいけちるそれまつ紅葉つれたり
十月之賀の山之の人〻西宮屏風
名をきけいおもしるくれ山ふれいさるる此を見うりけり
頼基云或所の屏風の歌よ志賀の山之の所
名をあ〻とるれるもしるさをうをぶさいうをまくき志賀の山紅
今案志賀の山之い春花のはうもかし紅ふか歌をもたり
此是山之〻よ志賀寺〻もまくて又白ら道之沢仰百首
の春頭よ為志賀山越云常寂但有花哥欲良玉集よ後
すし志賀の山紅葉をる又志賀花園と云ものあり
平等院信西舞の座林の花園そのありとて
なをもくき
もろ歌のもりの紅のしたれたるもくきまのをもくたまのを

顕昭云なをもくきとい考万葉卷云正月三日公侍従置子王ホ
令侍於内裏之東屋垣而即賜玉筥肆宴于時内相藤原朝
臣勅宣諸王卿令随意任意作哥賦詩仍題詩旨各陳心
緒諸人哥未得
私云はうい家持之但未奏云
今案之第をたまをて偶哥賦侍とい書なれと何物をなま
はきとそ云とい云とも紅葉の紅荒田花
又万葉歌の中に弟王挿鎌天木香茱萸哥
ひはきかりこかはうもの木と多りあうとかきはうんあ
私云常の鬼鬼ゆい玉もくきとい著と云草也ねるうまい手葉と
少紅よとりくもく宵ちつねの日こうひちる歌をもけい回めく
ひはきとい云ふりとりしれい出万葉集の哥も意之ある
禁中也とあ云はもさる歌うて平之の哥とあれい和子日
ていありもしん沙哥うていを内きくもの本みりめをよ井
ふれいをり初子日の紅葉を少をもひはきかりこかをもくとも
めとく云葉とい切回くりいつまれとものあり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中世と山ゑのうくいゆるふ世云伝て仰へあるまこあるを
臺蓬抄云井みのこうゑ世ゑ所ゑ所ゑ
ゑるゑる松をりきふゆゑく所月の初みにちる
奥義抄云初り紀をい祝の初ふしん事の初六人ひまるる
物ゑくあれいまにとるゑに命のふゑまあり
侍医抄云むさきゑ初子日の松をゑとゑ
今云さきゑふ松ゑ笑ゑ乱菊を松ゑ笑ゑりゑるれいた可云臺
蒙のまろるゑゑある松るれい初第ゑいるゑいゑきあり

毎月廿五

ちもや山ゑるものまりのなまりつ九ゑ四のそあゑりり
張仲云初ゑゑい初枕也初菊を菊ゑ出きれぬゑれいめ
らしさに位のせり
法服或云法威云佛九法結之此不知者孫仲北方奉之
功実如
威ありてひとの海ゑ廿ゑ人ゑ海やま初とるゑふのりゑそゑりり
見ゑ上ゑ也ゑゑい真言図ゑ要陽所出ゑ成就ト云ゑ

廿日

きみゑりゑきみゑくなりぬ山毎互の初ゑ人ゑ毎ゑ海ゑ
雖姫云考萬葉集云此云山多互者見考選本者云ゑ
今案ゑ考ゑきゑいて来きゑるものい山をゑ
ゑ世ゑきの海を異して初ゑ月ゑゑ
ゑるゑゑゑるゑゑゑゑみのゑゑゑ
の案ゑゑゑゑれいゑこゑ海ゑ世ゑ
きみゑの海ゑけゑゑゑ毎ゑ山毎互祥初ゑ人ゑ海ゑ海ゑ
ゑゑ同祥の云の山ゑ祥ゑゑ祥ゑの云同丑青ゑれいゑ
ゑゑゑのゑ初ゑ世ゑゑ云い又山ゑ
初ゑ月ゑのゑいゑゑゑゑゑ祥ゑ祥ゑ
海ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
いゑれゑ百ゑ山ゑ川い遊ゑ世ゑ
海ゑゑゑゑ臺蓬抄云ゑ海ゑ海ゑ
侍医抄云山ゑ川ゑゑゑゑゑゑゑ
今云百ゑゑ遊ゑ世ゑ者ゑゑゑ

[illegible]

玉勝春内の大野より母のあく山まで

題詞云たまきはるとは枕詞なり

暑しと書れたれいうや今はせくよりあるか多

[illegible]

[illegible]

又考万葉長歌云

霊剣内限者 隅曙郡州人考 百七年

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又いかき国とうみとうるあり
あきのみとうといへあやまき（玉限）るる石橋国のうくれたるつま
そそいそうをあなるるつまをかあたるる但万葉ま玉晴石
国と云ものけ以又別事れ玉限とを晴とかきあやまりて
かけうとあるれ事まの字ろうはられぬ
をあきるるつやのうくはりをたちてもいてもまみうちふ
そ以我屋をかるれ又我書とあるれかつうるし
云石橋云只以魂きいまりぬと云事
いくたくしのとと云事
又うあきるうち我初回のとひも事あきるいまう紀少ちと
いあるけのものふうれとまとい事いうろ川のあをかめんと思
かりうあるふもまと云何とをくうあるをされいられもたま
きけうとをうをりめんとそりるる次のあもいまうを少ちをか
めんとそひをけるられをあうてみてしきぬ人をいのちを
よあるあるとあるとをつうあるあるあるあるあるあるあるよ
以何てうかあうとそうあるうあるよ

童芸雲云たまきるるといろのうろひとりうやいのちれわる
ときをそあまきるるいのちを後あるりうるれい日年紀よ武門
の家稀の思絵をしせ北うりにうあるをかるうれをか
けうも数門を後うる宇居門まそうり武門家稀云云
あるのみせれるうるあるくうりたるうるまきそうちとうる一つ
とりよりるるるやされとせうそれうそうれいられも
いうるきうめ
今云此云事あきるるもよまねい以云事みうるみ年よ宇居よ
とうるつと云何を四のかあのる思うせうるるやいまを万年のの
以云い舞用夫皇拾藤内野し時中皇命使同人連老獻云の
云云也

とうるるまうう
うれうみそとうるたうとうりにうりやうをかれうもらひを日まをれ
題昭云たふかるうるうりのをまりそ毛のりうとをるとりるる
毛あそ毛うるるる

[illegible]

長能卿云

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]ふ海の事めなるをふ
也或い野なとそれうをを
童蒙抄云やうとはいとうへうを云
奥義抄云とうふまりとりふまりあれ
[illegible]とはかりいさうるみのとるもちれ
とうてうらのすえいふまれかてうるをもとうてうとうふときく
たりれ用つうるの
もたう
[illegible]
顕昭云はうとはいとやたうを云
とうるもうれ必人の物ひをれ
たきて[illegible]とうを
山のもの[illegible]
[illegible]
第保元年[illegible]
[illegible]

つまはいとうをおるをうさやうなる
名も皆さのこそ侍れ又をう北中よ鶴
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
侍[illegible]云[illegible]
あるを　仙云ものたうをいふ
[illegible]
顕昭云やうとは[illegible]相[illegible]
をはのたり[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

くきとうのそやいあるべし尾の海の文まてあるべき
也さくのとふとけもやうとときこゝ作りき
百葉集に此歌を矢形尾とかけもさうの海やゝ同歌
袖抄云尾はさうの海と云和のあるを云こゝ同歌うさを海
のちりぬるゝやうさを大屋うをまりいちいきりたるすす
奥葉抄云尾の上乃矢の和のやゝくきうの海きりゝ鶯
形云古今云
とうゝ山さうみ者ゝりうゝしてわぶゝてうやうをのたう
海ちぶのさう
題服云海ちぶのさうとはまちとくらのびきゝうつゝあ真白郎の鶯
立をたるゝ云ゝうりさちぶのさうとはうやへとぶと同
とそこの色のあるゝ海ちぶいきちをゝうゝ海そうゝをあ
るぶいきいきゝうのさちぶの中ふうく者ちをたるをまちら
海と云歌又云まゝ海のたうとゝ山をゝ
袖抄云目の白ゝ目の色のさうゝ

蘆葉抄云まゝうゝとゝ目の上さうゝ
はまゝうゝはゝうに風をかゝゝ海ゝうゝ乃鶯と云歌今云まゝら
のたうゝさちぶとゝゝまゝ者ゝりあゝはれゝ者海の
鶯とかけるゝをとゝりゝ又万葉集
題ゝ仰白大鶯ゝうゝ海ゝ海の鶯とゝ麻之路とうきて
其文字もゝうゝ
やうゝ麻ゝ路のさうを山やゝ
ゝも仰白大鶯ゝ云ゝはれゝまゝ
うゝもゝひつ海
かゝゝ紀のゝきあひのまま
歌やゝまゝき歌やうゝ紀かゝきゝ紀ゝきあひのまゝ歌をゝら
題服云かゝゝきのゝきゝのひのまゝとゝかゝゝ少川の歌あり
一ゝはかゝゝきのもゝを云ゝり一ゝはゝうゝ紀とゝひうゝきゝうゝ
うゝきゝと云
風葉抄号帰来云かゝゝきゝとゝはゝ得ゝかゝゝきゝと奇ゝうゝ紀
とゝぶゝ神のはゝうのつゝまゝうゝるのやうゝまゝうゝるゝ歌ゝ又の名

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二四八

[illegible]時宮二四八とそをもうすなり

顕昭云四字の方塔婆のありと侍るへしかれとも

[illegible]又二四八とかきたりしを[illegible]

いとゝ世の人[illegible]一とそたとひ二四八と書たりとも[illegible]

[illegible]二四八やゝ川とよむ[illegible]

[illegible]文字のことはいつれのまうしたりしの[illegible]

[illegible]一とそ三年一字

[illegible]七文字の白八の字

[illegible]を二四八とそ

[illegible]

[illegible]時郡[illegible]云

[illegible]

[illegible]二四八の何可[illegible]

[illegible]

[illegible]時[illegible]

[illegible]

[illegible]

百余年百年ノ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]

少宰

昔雄略天皇葛野へ行幸ありて井を御覧ぜられしに白きかの出でたりしを御覧ぜられて是は何の井ぞと問はせ給へば白き水の出でたる井なりと申しければ其の井を白髪の井と名付けられたり其の井の水を汲みて御覧ぜられしに白髪の如くなりしかば其の井を白髪の井と名付けられたり

又云ふ白髪の井は葛野の郡にあり

又云ふ白髪の井は葛野の郡にあり

又云ふ白髪の井は葛野の郡にあり

事多

奥義抄云ふ世に少なき雄黄の野とは何の野ぞと問ふに答へて曰く井の水を汲みて見るに白髪の如くなりしかば白髪の井と名付けたり

備前の国の野とぞ

私云備前の国の野とは備前の国の

紀の国の野とぞ

紀の国の野とぞ

侍従物云ふ雄黄の野とは何の野ぞと問ふに答へて曰く今云ふ雄黄の野とは紀の国の野とぞ

あまたの説ありとて書き尽くしがたし

中ごろ云ふ雄黄の野とは紀の国の野とぞ

又侍従物云ふ頼綱卿の説に井の水を汲みて見るに白髪の如くなりしかば白髪の井と名付けたり

私云あり所の水を汲みてみるに白髪の如くなりしかば白髪の井と名付けたりとぞ

[illegible]
宗延云昔[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号　特1-1983
ガラス使用

[illegible]

みちのくにあきたのはま[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七八年のころ又おなじ使まいられしに[illegible]

[illegible]

今年は若狭守[illegible]

[illegible]

[illegible]

奥義抄云むかしいかる宮にすれば世をはじめ
川る歌物見車を添いるる宮をとりていまてりはを車る
まとうの人らの宮れもをやあんとの
あ海地はるをたまりわるすてられそるみいかきりる
ほ一と云ゝとりあちい経よ如烟盡燈滅と云文あり仏の滅
約を云ゝ是をうせ〳〵人の志ぬるをもとりしのきるまをて
りうあり一と程なるぬやと云を車をしたなりぬるのるき我
なるあ〳〵ふるりつ〳〵ふ一と程〳〵
私云と一程なぬるの車やいう又とりけちふるひの中
形のとを一ふちまるゝ程の文とりせ仏の滅・拾をて四ひ
ふをるや

法ともす火

百年を知とせをは法ともうみ物とうあ
弘服云法くもかみとふい法くもと云海岸あり江南寺と書り
光くまもとをあり鬱花ふ現に年ふる古地をふかひて
薄を仏生れ年なり云れぬも法くもとかれ日ろ現ゆみ

特1
1983

右一巻於筑紫寫之偏依籠居徒然也

天保十五甲辰正月廿八日　本嶌長蔵衛道

小清原

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』　請求記号　特1-1983　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『袖中抄』 請求記号 特1-1983

ガラス使用